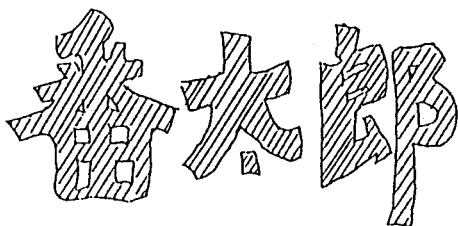


NEW



1994. 02. 08
本年度 第2号
(通巻第16号)

人文学部教職員組合発行

いまこそ組合の、組合による、組合のための革命を、組合の手で!

人文が区分 引く見合い員 稲賀繁美

もう数年前のこととなるが、どうして組合に入らないか、と問われて、革命をやる気のない組合になど加入する気は毛頭ない、などと放言したことがあった。組合の闘士だったはずの人間がいったん学部長にでもなってしまうと、突如役がら所をかえて、団体交渉で儀式同然の釣るしあげを食らう側にまわる、というのも解せない話だ。

実現しなかった革命の幻想をむなしく追い、飽きずに内部抗争に明け暮れる輩の居直りの強弁に対抗して、いまこそ革命を訴える。

(1) 人文学部構成員が少なくとも年に1ヶ月、できれば半年は海外のフィールドで研修に専心できる環境を整備しよう。リレー式授業、複数教官による共同授業の提唱はそのための布石である。いまだき週一度同一科目の授業を学生に提供するというサイクルは、知識伝達の現実にも、研究者としての活動の周期にもまったく合致しない旧弊の遺物である。特昇がどうのと、セチコイ勘定と悪平等の実現に現をぬかす暇があるなら、少なくともその意志をもつ構成員が思う存分研究できる環境を支援する体制を整えるのこそ急務ではないか。前期は2倍の負担になっても後期半年は海外で存分に資料収集と国際的学会活動のできる条件を整えなければ、生き残りは不可能だ。

(2) 過去のいきさつは知らねども、事務職員と教員とが互いに差別意識をもって、新年会やら年度末の宴会やら、組合活動の別を順守するのは、はっきりいって病的である。職員(とりわけ管理職)の組合が必要とされる昨今、時代遅れの管理者対労働者、国家権力対組合などという図式にとらわれて、事務と教官の無意味ないがみ合いを根拠づける姿勢こそイデオロギー的妄想にすぎぬ。「崩壊」してみせた共産圏ですら--ないし、ならでは--、その勇氣によって、こうした図式の非現実性を証してみせた。それこそが「共産圏」の偉大なる歴史の教訓であって、民主主義・自由主義を標榜しつつ、自粛という名の声なき声の圧政が事勿れ主義の発露として横行し幅を利かして--:部落解放同盟は日帝の裏面だ--、「個人」の意見が大新聞の投書欄から完全に抹殺され、その反動として傾聴すべき意見はかならずや背景に色が透けて見えるこの情緒的全体主義国家・日本を打倒しよう。

(3) 同朋を設け同志を募れ。魂の唯物論擁護と、一枚岩の知的共同体なる全体主義からの訣別のために。これって某「蓮實」節とは無縁です。闘争の相手を、共通の土俵をもてぬ他者に求める徹底したいかがわしさが完膚なきまでに払拭された日本の--とりわけ公共義務教育による狭隘なる--一元的価値観押し付けの恐ろしさ。十邦の外国人朋友をもたざる教師は、要件を満たすまで国外に有給追放せよ(とりわけ留学未経験のまま就職した若年教師)。一人の外国人親友をもたぬ学生は卒業許すべからず。以上三項から日本改造に着手したい。